Title	繪姿女房譚の系譜
Sub Title	On the origin of "Portrait Wife" story (繪姿女房譚)
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.34, No.3/4 (1962. 3) ,p.23(277)- 49(303)
JaLC DOI	
Abstract	The folk-tale called the "Portrait Wife" Story in Japan is of the same type as the "Featherclothing" (鳥衣競詩) in Lina. The latter has been already discussed by W. Eberhard, and the outline of the story is as follows: (cf. Typen Chinesischer Volksmarchen 195, Das Federkleid FFC No. 120.) 1. Ein Mann hat eine so schone Frau, dass er sich nie von ihr trennen kann. 2. Aus wirtschaftlichen Grunden muss er aber Geld verdienen. 3. Die Frau gibt ihm ein Bild von sich mit als Ersatz daftur, dass er sie nicht sehen kann. 4. Das Bild wird vom Wind in den Hof des Konigs getragen. 5. Der Konig lasst sie suchen und holen; sie wird Konigin. 6. Der Mann macht sich ein Kleid aus Federn und kommt eines Tages auf Verabredung an den Hof und bieted Gemuse an. 7. Seiner Frau lacht zum ersten Mai, als sie sieht. 8. Der Konig, der sehr betrubt darubt war, dass sie nie lachte, freut sich, tauscht das Federkleid mit dem Konigskleid. 9. Der mann lasst den ins Federkleid gekleideten Konig toten, wird selbst Konig. This type of stories have been found widely among the Chinese of the several provinces-Chiang-su (江蘇). Che-chiang (浙江). Kuang-tung (廣東), which have been mentioned by Eberhand, and Anhui (安姆), etc.; moreover, it is found among such minorities as Miao (苗). Bai (自). Tibet (藏). Zhuang (僧) and Nasi (納西), etc. of the province of Hunan (湖南), kui-chou (貴州), Ssu-ch'uan (四川), Yun-nan (雲南) and Hsi-kang (西康), etc. These folk stories are often accompanied by the introductory parts which tell how a beautiful woman passed through life before she gets married to a poor young man, and these introductory stories are divided broadly into three groups: 1. a group of stories in which the beautiful woman is a heavenly maiden or a dragon-daughter. 2. a group of stories in which we beautiful woman is a heavenly maiden or a dragon-daughter. 2. a group of stories in which we beautiful woman is a heavenly maiden or a dragon-daughter. 2. a group of stories in which we beautiful woman is a heavenly maiden or a dragon-daughter. 2. a group of stories in which

	the wife said to the emper- or., "If you will put on the clothing of the warty toad, I will believe you more." Then the emperor took off his clothing and gave it to the warty toard, and the warty toad took off his skin and gave it to the emperor. The emperor put on that skin and turned over a somersault, and that skin stuck to him, when he turned a somersault back again, he could not take off that skin. Additionally a common factor in the "Featherclothing" Story and the "Portrait Wife" Story-namely the factor that after the wife gave her husband her portrait, it is thrown off by the windseems not to be found in the original pattern of the Stories. But it seems to me that in earlier times-at least before the Story came from China to Japan,-the factor had already come into the Story and made it more interesting.
Notes	
Genre	Journal Article
	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19620300-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

繪姿女房譚の系譜

伊 藤 清 司

かれて、女房の履歴を説くことを忘れてしまつたためであろうか。 までもなく、標題にかゝげたようにこの說話の出自・系譜そのものであるが、もう一つの方はこの傳承の女主人公であ うとしない夫に、女がおのれの姿繪を描いて與えるくだりからはじめているのは、やはりこの物語の後半の面白さにひ い考えてみるまでもなくはじめから自明のことなのである。それを語らずに話の發端を、 とがこの話の展開の條件のようなものであつたから、何のとりえもない貧しい男の細君としては、不釣合いなことぐら の持主で、それ故に殿樣が無理無體にこれをわがものにしようとしたのであつて、はじめから女が絕世の美人であるこ う女房の不思議な出目については何も語つてくれぬものもすくなくはないが、それでもこの女は必ず鄙には稀なる美貌 る繪姿女房自身のそれである。もつとも土地によつては話の冒頭から、むかし~~貧しい夫婦があつたとサ……と、も わが國に廣く傳えられている繪姿女房の說話をめぐつて考察してみなければならぬ出自が二つある。その一つは申す 女房の美しさに見惚れて働こ

それともこの話を語り傳えている間に、しだいにこの夫婦のいかにも不釣合いが氣になつて、ことさらにその女房の

繪姿女房譚の系譜

(二七七) 二三

その女の才覺と指示によつていて、夫の方はむしろ自分の女房の才色にうつゝをぬかす態の、男らしからぬ男である。 びた夫にくらべて、いかにも女の方の格別なために、その出身がいろいろ詮索され空想されていつたのであろうか のろで、蕪燒笹四郎が仕樣のない怠けぐせの男だつたという岩手遠野のような例外はあるが、同じく傳說・說話の中の しかも新潟の中蒲原の場合の權兵衞はとくに極端なはなしになつてしまつたが、どちらかといえば嫁のきてもないうす 出自を問題にせずにはおれなくなつたのであろうか。すなわち、この物語がめでたく大團圓となつているのは、すべて 主人公に同型の夫を捜しだすとすれば、精々炭燒小五郎といつた、とり得といえば、ただ實直な男というに過ぎない 資料の中に確かな手がかりらしいものの獲られそうもない今、所詮はひろく蒐めて丹念に比較してゆくほかないであろ づれの筋がもとの型に一番近いのか、辿りたづねてみても徒らに亡羊の嘆をかこつのみであるが、さりとて過去の文献 實はおいく一詳述してゆくように、この繪姿女房譚も多岐な複合をなしていて、全國に分布する數あるこの說話のい

るかどうかの詮索は、それ自體無意味のように思われないでもないが、しかしこの問題の摸索は、 の傳承の過去をさぐる上に何らかの手がかりを提供してくれるものと自分はひそかに期待しているのである。 はじめに女房の出自を說くものの方がもとの型なのかどうか、あるいはこの女の前歴を語つた部分をのちの複合とみ わが國に流布するこ

_

えられている水浴に舞下りた天女であるとする羽衣型である。 ところで、繪姿女房の出自を説いたものの中で、とくに彼女の前歴の神秘さを語つたものは、 東北・岩手の紫波に傳

こでざづかつてきた美しい嫁が龍王の娘であつたという。 市木村や、佐賀南高來郡小濱の傳承がその例で、その龍女の夫というのは島根では薪賣り、肥前ではゆづり葉やうらじ(2) ろなど正月飾りの行商をする貧しい男になつているが、ともに賣れ殘りの品を水中に投じたのが緣で龍宮に招かれ、そ これに對して、同じく水に緣はあるが、海の彼方からやつてきたとする龍宮女房型で說くものがある。

者の娘が自分から望んで押掛け女房となつてやつてきたと説いて全くの虚構ではないと主張するような、女の出自を語の娘が自分から望んで押掛け女房となつてやつてきたと説いて全くの虚構ではないと主張するような、女の出自を語 安積山の糠次郎が長者の美しい娘を嫁にもらつたり、福岡縣築上郡友枝村に傳えられるエンブという親思いの百姓に長 り現實的であるとはいつても、一介の野夫にとつては所詮夢想にすぎないが、福島縣安積郡片平村の傳說中の主人公・ つた型の傳承もすくなくない。 女のもつ神秘的な能力の秘密をあらかじめ暗示するように、こうした異類女房譚によつてその出自を說くよりは、

ょ

怠け癖をなおそうとかゝつた旅の美女、あるいは新潟の中蒲原五泉のうすのろ權兵衞の敝屋に押掛女房となつてやつて 違 中にはそんなこともあろうかと信じ、あるいは信じさせようとする語り手の願いや細工のあとがあつたものにもちろん 來た見知らぬ女を語つた來歷譚の方は、天人女房や龍宮女房物語よりは、テンからの昔話ではなくて、世間の不思議の リエーションの色合いを多分に帶びているように思われる。 おそらく、女を富貴の出とするこうした型の物語や、岩手縣遠野の蕪燒笹四郞のところに、ある日訪ねて來て、 ないのであるが、しかし、この富貴女房の來歷譚も、見知らぬ女の押しかけ型の昔話も實は一種の異類女房說話の

ばされて城中に落ちるというのも確かに偶然すぎて現實ばなれした話であるが、それよりも何より同じく空想的である というよりも、 この繪姿女房の説話自體がいかにも空想的な物語りである。 たとえば、描いて與えた似顔繪が風にと

繪姿女房譚の系譜

とはいつても、すでに先覺が注意しているように、

は、 百姓と殿樣との身柄のすりかえ、 到底日本の農民の普通の空想では有り得ない(8) 何か皮肉なる諷刺を含むかと思われるような、 この奇拔なる貧富幸不幸の裏がえし

と思われるのである。

Ξ

scher Volksmärchen"の一書をひもとくだけでも、もはや疑いないことゝいつてもよいであろう。姿繪がもとで女房 みではなく、內陸奥深い山間僻陬の邑里に至るまで一再ならず語り傳えられているのである。 のこの說話が、ほとんど同じ型で中國大陸に、しかもエバーハルト氏のあげたように東シナ海に臨んだ一部の地域に 破顔一笑し、喜んだ殿樣はおのれの衣裳をぬいで男の着物と交換し、とたんに男たちの主客が顚倒するという奇拔な筋 を城中に召上げられた男が、女のいゝつけ通り、後日城を訪ずれゝば、城にきてこの方たゞの一度も笑わぬ女房は忽ち わが國に流布するこの說話の成立を日本國土の外に求むべきだという予見は、エバーハルト氏の"Typen Chinesi-

しかもこれら傳承中の女主人公の不可思議な出自について語るものゝ中で、天人女房譚をもつてするものゝある事が

まづ注意される。

潜めていると、果して七人の天女が舞いおりるのを、 字のつく好人物であるが、からかわれているとは露知らず、里人の言葉を眞にうけて七月七日の夜、 廣東に傳えられる繪姿女房說話の中で、秀呆とよばれる若者は、この種の話の主人公の典型で、正直の上に馬鹿の文 獲たりとばかりその一人の裳を捕えて離さぬのが果報のはじまり 山頂の池 畔に身を

で、村を驚かすような美しい女を嫁にしたのであつた。

この種の説話が二つほどグラァハム氏によつて報告されている。(ヨ) するだけで、凡夫と夫婦になる經緯については多くを語つていないが、 出自を天上に求めようとする點は、岩手・紫波の女房と同類といつてもよい。その他、單に美女のふるさとを雲上界と 華南のこの天女は水邊で舞うだけで、水浴こそしたとはいつておらず、また當然に內容の疎密有無はあつても、 四川南部の川苗の社會にも天人女房型を伴つた 女の

る。 げに沈み、柴木をかついで家路へ急ぐ古卡のあとからついて來て、やがて名を依娌と呼び、天上の仙女と見まうばか りでは、おそらくいくつかのバリエーションがあるに相違ないが、母一人子一人の貧しい若者古卡の前に、 の娘に變身した いもかけず出現した美しい若妻の前身が、花よりも紅い鷄冠をし、黃金色に輝く羽根をつけた鷄であつた。夕陽が山 長詩「百鳥衣」は中國西南に住む僮族が愛誦し傳えてきた一大叙事詩であるが、これも實は繪姿女房譚の一類であ 一九五四年、「人民文學」の五月號に採錄されているこの傳承は、(ユン) 章其麒氏の採集整理した作品といわれている限 ある日、 思 ŋ

みられるのである。 房の一類ともみられぬこともないが、むしろこれを龍宮女房のグループに入れてみることも不可ではない。實は西南中 となるという物語が多いのであるが、龍王から贈られるその實器に代つて、小犬や黑猫の類ならぬ鷄の登場する傳承も 國には小蛇や魚などを救つたお禮に龍宮へ招かれ、そこで手に入れて歸つた寶器の中から美しい乙女がでてきて、夫婦 羽根をもつといつても鷄は本來、天上のものなのか地上の所屬なのか。この鷄の化した依娌という異類女房は天人女

雲南省の西北部、金沙江の支流に沿う麗江地區の摩些 (納西) 族の龍女と樵夫の話はこの一例である。 盲目の老母を

繪姿女房譚の系譜

うな美姫に再度姿を變えて柴刈り男の押掛け女房となつたのだが、 辭退し、最後に抵柴棍という如意棒樣の杖と竹籠に飼つている白鷄との二つを頂戴して家路につく云々というのが、こ 廣西僮族の叙事詩に歌われた依娌の鄕土は天の彼方というより水の底というにふさわしくも思われるのだが、 の説話のプロローグである。その白鷄が樵夫に好意をよせるかの龍女の化身であつて、これがやがて領主の羨望するよ 土産を贈られるが、樵夫は龍女(―實は救つた小蛇の變身)の示唆に從つて、つぎ~~に運びだされる金銀珠玉を悉く 抱えた貧しい柴刈りが山中で黃蛇の危機を救つたお禮にと龍宮に案内され、歡待の限りをうけて歸國の日、 7 龍女とい 實は繪姿女房の神秘な前身の説明としては本質的には相違がなかろうとはさきにも述べた。 龍宮女房型をとる摩些のこの傳承に照してみれば、 例によつて 天女とい

四

してこれらの型の説話もすくなくない。 の縹緻を强調しても、その出生の前歴については何も語らぬたぐいの型式が中國大陸にも當然あつて然るべきだが、果 嫁にしたりするたぐいの、この世のまことらしく妻の履歴を語るものや、福島縣の磐城郡神谷村の傳承のように、 日中双方に繪姿女房の出自を羽衣説話や龍宮女房譚で説くものが共通して見出されるからには、糠次郎が長者の娘を

の說話 區 の類である。 安徽の傳承「天鵝寶蛋」や、貴州苗族の「阿秀王」の話、さらに雲南西北國境に近い疊々たる山岳に住むチベット族(18) 洱源の白族間に流傳する「巧女」の昔話は、實直な男とその美貌の妻というだけでとくに女の出目を説明しない後者(g) 「木匠與公主」の物語などは女を深窓富貴の育ちとする前者のタイプの 繪姿女房譚 であり、(エン) 上海・普益書局刊の「民間神話全集」は採集者・報告者の名を付記することはあつても、當該傳承の採集 同じく 雲南 の 西北

毛衣」 地點を明記することが稀で、 と題した説話は、 冒頭、 ためにその資料的價値をいちじるしく低めているのが殘念な書であるが、その中の 顔中かさだらけの百姓が器量ものの女房を娶つたと語りだしている限りでは、これも後 「百鳥

者の一例といえよう。

娶るにあたつて、 阿秀が、 がみられる。 房譚でもおなじみの、王宮を三重まきにする灰縄や、 ることはさりながら、 貧しいが幸せな每日を暮すという發端の繪姿女房譚であり、一方、貴州苗族の「阿秀王」の物語は、前半貧しい職人の 寶の卵を艱難辛苦の果てに、 としてはどちらかというと男主人公の半生に話の重心がおかれた筋のこみいつた物語である。 にほかの物語と結合しており、また、後半はこの若者が新妻を奪い返えすのに繪姿女房譚の例にもれず女房の智慧によ の物語は、昔、富豪の召使である王保という名の青年が、主家の娘とわりなき仲となり、 ところで、 一國の王宮の奥に育つた端麗の王女をうるまでの難題聟說話であつて、その内容は天鵝寶蛋のそれ以上に複雑 はじめ「安徽文藝」に掲載され、のち「民間故事集——一桶飯乾」 阿秀が國王から課せられる試錬 その間かずかずの奇蹟や幸運にめぐまれて、やがて隣國の王位に即くという、 大蛇の腹中に入つて掌中にし、 難問の中には、 「山中にばらまかれた三斗の豆を一粒のこらず拾い集めよ」など めでたく娘をわが妻として、 この繪姿女房説話と密接な關係の予想される難題女 の冊子におさめられた上記 主人が課する難題 母親と三人、 なお、その高貴の王女を このタイプの説話 畑作りをして 「天鵝寶蛋」 一天鵝の

西康工作隊の手により採集された傳承の一つとされ、 五 九年に出版されている。 西康に近い三千五百米の高地、 おそらくこれはこの僻境の傳說・說話の公けにされた最初のものであろうが、 雲南中甸地區のチベット民の語る大工と王女の物語は、一九五三年、 中國民間文藝研究會編の「澤瑪姫―藏族故事集―」におさめられ 彼らの繪姿女

繪姿女房譚の系譜

工奴! 頓智を缺くが、これも難題聟譚の一 すも倒すも御意のまゝ」と、ついに王女をわがものにする。そうした威々しさがあつて、 華麗な宮殿を築き上げた若い大工が、所望は…? 房譚も苗族のそれ同樣に若い大工と國王の愛娘との婚姻譚にはじまる。王命によつてわづか三日の間に、 と激怒する王樣にたじろぎもせず、 類にかわりはなく、 かえつて極彩あざやかな大黑柱に鋸の齒をピタリとあてゝ、 と褒美の品を問われて、美貌の公主を求めるが、身のほど知らぬ大 後文でも言及するように、苗・ 藏いづれの場合も愛妻を奪つた 苗族の阿秀のような優雅さと L 「御殿を生 かも獨 力で

說話を採錄し、 に筋書の吻合しているのは、この説話の著しい特徴なのである。エバーハルト氏は上掲の勞作の中で、 るにまかしていると思われるのに、 るが、そのおの~~における小異はまことに干差萬別で、これを傳える土地と住民が好みによつて隨分と自由に改造す うなことは、この繪姿女房の履歴出目については上述のように大筋三つの場合のいづれかをでないに相違ないわけであ 何倍か何十倍かのこの型の説話を紹介することになろうが、たゞ今、二十前後の僅かの類例からでもほゞ間違くいえそ 房譚の場合でももちろん簡單にはきめかねる。 隣國の王を殺害して、ハッピーエンドとなるまでの後半の話の大筋は一致している。 い男の嫁になるという發端がこの説話にはじめから是非備わらなければならなかつたものか否かは、 女房の出自を說くものとそうでないものとで、どちらがもとの型なのか。 五 整理しているが、 彼の文を借りて男が美しい女と一緒になつてからのちの物語の展開をのべればつぎの彼の文を借りて男が美しい女と一緒になつてからのちの物語の展開をのべればつぎの 夫婦になつてからのちの話が、ほとんどいづれの場合でも不思議と示し合せたよう おそらく大陸において今後の民間傳承の採集と研究とが、 異境からこの世にやつてきて、愚直な貧し 中國大陸の繪姿女 七例の繪姿女房 あらたに今の

如くである。

- ○經濟上の理由から働かねばならない。
- ○男は妻から離れなければならず、妻は代りに自分の姿繪を描いて與える。
- ○その繪が風にとばされ、王宮の中に落ちる。
- 〇王は繪の主の女を搜し出し、妃にする。
- 〇男はある日、打合せておいて鳥衣を着て王邸に野菜賣りにゆく。
- ○男をみて妃ははじめて笑う。
- 〇妃の一向に笑わぬのを悲しんでいた王はすゝんで王衣とその男の鳥衣とを交換する。
- ○男は鳥衣を着けた王を殺させ、自ら王位に即く。

多くは田畑となつている。これを畦や傍の木の枝に飾つて、一鍬入れてはながめ、 合で、もと一一勤勉な男であるからかえつて仕事に精も出るのだが、しかし考えてみればそんな戀しい女房なら一緒に てみなければならない問題であるが、これは暫らくおくとして、妻が與えるその姿繪を携えてゆく男の仕事は大陸でも 顔繪というものがあつたか、さらに西方の文明社會ではどうであつたかについては、この説話ときりはなしても研究し も同樣で、この繪姿の一件だけは、どうみてもそうした蒙昧の土地の産とは考え難いのである。 を容易に想像させる所以であるが、 肖像畫などという洒落たものが、わが國の村里に大昔からあろう筈もなさそうなところから、この話の輸入說話たる この點は中國邊境の長らく文化が未開の域に停迷していた少數民族の社會について ながめてはまた鍬をおろすという具 中國では何時頃から似

繪姿女房譚の系譜

(二八五) 三

る。さらに白族の例であるが、妻が二枚の繪を與えて、畦の兩側にたてさせ、耕作のゆききに女房の顔がながめられる(8) ろす鋤も碌に土をうたず、そこで妻は一枚の自像畫を畦の上にたて、自分は向う側の畦に立つという工夫をこらしてい せた女房をながめながら鋤をおこしている。それでも往復の片方で、愛妻と背中合せの時は、夫の氣はそぞろで打ちお それでも雲南の中甸の夫婦では、男は寸刻も新妻のそばから離れてはおれず、一緒につれだつて野に出かけ、畦に立た 畑につれてゆけばよさそうなものだが、女には家にとゞまつてなすべき日々の仕事があるというためであろうか、それ ようにしたという。これらはもちろん、語り傳えられてゆく間の土地々々の工夫であり、わが國にも似た例のある下手 とも女房とつれだつてゆくなら姿繪の必要がなくなる故であろうか、畑打ちに出かけるのはもちろん男ひとりである。

は、王保が畑仕事にも姿繪を携えてゆくが、そこではとばされずに、街に野菜賣りに出かけた折に、風にさらわれると 同音であるが、一・二の些細な異曲はある。苗族社會にも風をよぶ故に口笛は愼しまなければならないという俗信のあ いう話になつているのであるが、この方はあとで王保が女房の指示に從い白菜を作つて王宮を訪れる話の筋に對應する つてのことにちがいないが、彼らの繪姿女房譚では、夫の阿秀が妻の予じめの忠告もつい忘れて、心樂しいまゝに、愛 さて、女房の與えたその似顔繪が突然の風で宙に舞い、いづこともなく飛ばされるくだりも、これまたほとんど異口 な合理化のあとである。

る。 ひとり悅に入つている男を、たま~~通りかゝた巡邏の漢人胥吏が認めるというのが、 繪を風にさらわれるという普通の話であるが、もう一つの方は例によつて畑の畦にたてられた女房の姿繪をながめて、(%) 動機となつている。 少數民族にもその例がないわけではないが、美女を强奪せんとする惡役はき まつて中國の 皇帝ないし 大官とさ れ 說話としては比較的異型で、かつ歴史的背景が說話に反映しているのであろうか、漢民族に對する反感が露呈し、 美人畫が權力者の手におちる經緯を語つたもので、やゝ異色なのは川苗の場合である。 川苗の傳えるこの種説話のうち、男の方が疣だらけの蟾蜍の身という變つた主人公をもつ一例は、女房の與えた姿 女が大官のもとに召上げられる 川苗の繪姿女房譚はこの てい 他の 種の

て、都の皇帝に献上したことが、幸運をつかんだばかりの男から新妻を奪う事件の端緒となつている物語である。(タロ) れた報告の三例中の二例までがそれく〜異つた型で語られておる點は注目される。 女房説話のほとんどは偶然の風が、話の筋をまづ破局へと導く因をなしているのに、 川苗の説話でとくに變化の著しいのは、この天人女房夫婦の隣人である獨身の中國人が、その人妻の美貌を繪に描い この限られた川苗の社會からえら

ちに無視できないものが感じられる。 然の風ならぬ人爲を媒介として公けにされるということは、 れることもないわけではないが、そも~~姿繪ということ自體が文明の色彩を帶びたものであるだけに、 これをじかに携えていつて示すという方は、これならばごくありうる現實で、それ故かえつてのちの世の改作かと疑わ 繪が風に運ばれるとか、秋田の生保内の例のように鳥が咥えて運ぶというよりは、直接人がこれを見て知り、繪が風に運ばれるとか、秋田の生保内の例のように鳥が咥えて運ぶというよりは、直接人がこれを見て知り、 繪姿女房譚の中の姿繪に關する部分の成立についてあなが 女の存在が自 さらに

七

チベット族の物語の如き、繪姿女房が城へ連行される途々、糌粑をちぎつて自分のゆき先きを夫に暗示するやゝ手のこ(32) これは中國でも類例がないではない。たとえば安徽の傳承がその一例である。夫に桃の實を渡して、これを植え、實がな ているのは、 て、さきの安徽の例、 官ののぞみに應じるとみせかけて、間もなく故國へ昇天してゆくという變つた團圓を辿る川苗の一つの傳承を例外とし りの示し合せである。 となるこの説話の重要な鍵であるが、 少年たちの場合はそこから話が展開してゆくのに對して、この物語では掌をひるがえすようなドンデン返えしの大團圓 の場合とても貧しい男の着物と城主の衣裳との交換が、あたかも王子と乞食少年の身分の轉換のように、然しそちらの んだものもみられるが、 白菜を作れと夫の王保に囁き、上述の通り王保は現に白菜賣りとなつて宮廷を訪ねている。これに對して、雲南中甸 つたらお城へ賣りに來いという紫波の昔話ほどの心盡しの指示はないが、妻の公主は別離に臨んで一株九斤半もある大 かく必ずきまつて妻は予じめこれ~~と指示した衣裳をきて會いに來るよういゝのこしているのであつて、これが日 城中につれ去られる折の妻が夫にいゝ置いてゆく才覺は、 幽閉中の女房を訪ねる時の男が着てゆく衣服について、一定の注文のついていることである。 からばその衣裳に隱されたどんな重要な意味があつたのかは今遽かに説明も出來兼ねるのであるが、 雲南中甸の例をも含めほとんど一致して、しかもこれこそが中國大陸の繪姿女房譚の特徴となつ 商品は桃や栗に限らず、門松やときには箒賣りや花賣りなどまで、種々の小細工もみられるが、 しかし女房の天女が官位とその夫人それに大邸宅と財庫のことが一を夫に贈ることを條件に大 中國のこの說話では夫の着ている着物ならどんなものでも構わぬというのでは 日本ではいわゆる桃賣型という名で分類されているふれ 日中いづれ な ع

ことはたしかな事實であろう。 觀して、この の標題を付しているのはその着衣の奇妙さに注意したためであろうか。いづれにしても中國で採集したこの種傳承を概 中間の著しい相異點となつているのである。エバーハルト氏がこの物語を整理した際、これに "Das Federkleid" Federkleid(羽衣)がその最大公約數的要素として抽出されるのでなければ、かゝる標題のつけかねる

八

がたしかにこの説話のメルクマールであることの傍證にはなろう。 分類しているが、これはエバーハルト氏のそれにならつた稱呼かどうか。とにかくこの標題も妻の指示した羽毛の衣裳 普遍的にしられた傳承であるという反證にはなるかもしれない。ところで譚氏はこの説話をやはり「羽毛衣型」として などに言及せずとも、かの國の同胞の讀者に何らの澁滯をも感じさせないというのであるなら、それだけにこれはごく くれておらないのは、私には隔靴搔痒とはこのことかと思われて歯がゆくてならぬが、しかしあるいは著者がその出所 いるが、その中にたまく〜繪姿女房譚が採り上げられている。譚氏はこの説話の分布や出典について何の暗示をもして 一九五七年の中山大學學報(社會科學版)の第二號で、譚達先氏は漢民族の昔話中に活躍する人間像の典型を試みて

僮族の繪姿女房の叙事詩が (₹5) 「百鳥衣」の名で採集・報告されてるのも夫のつけた衣の奇妙さのためであろう。 妻の依

古卡 古卡

娌が惡德の土司に强奪されてゆくとき、夫に向つて

心配してはなりません

繪姿女房譚の系譜

二八九) 三五

私をさがしに役所へくるのをあなたが百羽の鳥を射て着物を作り

百日の間待つてます!

縫い上げ、妻のいる土司の役所を訪れている。 といゝ遺し、一方、夫の古卡はその後果して山に入つて九十九日を費やし、百羽の雉を射て、その皮毛で一枚の着物を

吹いて妾を捜しに來て頂戴と夫の阿秀に耳うちをしている。 州苗族の傳承ではどんな鳥でもいゝから百羽の鳥の皮毛で衣服をつくり、それをきた上、苗族の傳承らしく例の蘆笙を つて男は百羽の小鳥を射て、 その羽毛で作つ た孔雀の羽根のよ うに美し い衣裳を著けて皇帝の屋敷を訪ねており、(38) た指示もこの鳥衣であつた。すなわち白族の説話「巧女」はその夫の名、 會いに來る時の衣が鳥羽だというのは雲南の白族の繪姿女房譚でも同樣であり、貴州苗族の繪姿女房が夫の阿秀にし 孔雀郎が暗示するように、 妻のいゝつけに從

られる別離の間際に、夫にいゝ殘したことも同樣の內容で、每日山にゆき、鳥を打つてその羽で衣をつくり、それを着、 月日の經つうちに、夫の體は種々の鳥の羽根で一杯で、あたかも色彩あざやかな鳥衣を着たようにみえるのであつた。「民 皮を剝いで體に掛けてやつて吳るようにといゝ殘している。この方は鳥の羽毛で着物を縫えとはいつていないが、旅の 間神話全集」にのる葛世栄採錄というこの型の說話はその標題がこれまた「百鳥毛衣」となつているが、皇帝に連れ去 の五十兩の銀を夫に手渡しながら、妻はこのお金を費い果した時、路々鳥を打ちながら、その肉で飢をしのぎ、その毛 納西族の説話の場合は、領主が繪姿女房を同じく召上げるのに代償を支拂うだけの仕儀に及んでいるが、その身代金

笠をかぶつて宮殿に現われ

九

鳥の羽の衣といゝ傳えなければならなかつたのか。 内容まで觸れたものが殘つていないのであろうか。そうしてこれが中國大陸では逆に、ほとんどこれこそ異工同曲に、 の島々では、しかもこの類の説話は隨分と數も多いにかゝわらず、何故に女房があとにのこる夫に策をさづけるのに桃 何にある。すでに試みてきたように日中間に大筋だけでなくこれほど細部にまでも亘つて類似をもつた説話が、 の實を渡してこれを植えよ云々とか、花賣りにやつて來るように云々ということがあつても、そのとき着て來る裝束の に捜し合えば必ず吻合するものが捜し當てられるに相違ないと信じられる程であるのに、それが海ひとつ隔てたこちら 繰返えしていうが日本と中國でのこの傳承の最も著しい、というより唯一つの相違は妻に會いにゆく男の着る衣の如 お互い

いであろうが、いづれにしても尋常な服裝ではない。 の獸皮で裘衣をつくつて着て來るよう附け加えている。百種の獸皮とはおそらく百鳥の羽衣の改變とみてさしつかえな(タキン) も構わぬというのではない。妻は別れに際して、例の一株九斤半の大きい白菜をつくれといゝのこした上、さらに百種 もちろん、數ある中には鳥の羽根でない衣服もみられる。 安徽の場合はこの例外であるが、これとてもどんな衣裳で

繪姿女房はいとしい夫に訣別の一言もいゝ殘す暇もなかつたが、夫は妻の例の機轉で路傍に點々と棄てられた糌粑のく 雲南のチベット族の場合はもう一つの例外である。群がる餓狼のように闖入してきた隣國王の手下たちに拉致され

繪姿女房譚の系譜

(二九一) 三七

ドッと哄わしているが、これだけをみれば、衣の裏返えしという頓馬が實は夫の頓智であつたかのようにもとれるが、 ずを賴りに追跡するのであるが、その時、夫の大工はわざ~~一たん部屋にもどつて羊皮の袍子を着ている。これがや がて城中の妻の策略で催された國王成婚の祝賀の會場に姿を現わして、トッサにその羊皮の衣を裏返えしにし、群衆を

いずれにしろこれももちろん鳥衣型の改造であろう。

うかである。この物語ではそれが女房のあらかじめのサゼッションによつたものとも、男の頓智であつたともいつては だと想像されるのである。 であつてみれば、この位の才覺があつても不思議ではないが、それもこれも實は繪姿女房が蔭におつてそう運ばしたの いないが、私にはその男ひとりの所作だつたとは思えぬ。義父王の課した難問を果して、所望を强要するさかしい大工 それには違いないが、たゞこゝで看過できないのはこの羊の革衣の裏がえしが果して男のとつさの智慧であつたかど

述べた。蘆笙の音や歌の文句の類がこの傳承中で演じる役割は、 にもとれるが、これらの傳承にも必ず百鳥衣乃至獸皮の衣を着てくることが不可缺の條件になつていることはさきにも 萬年の基!」とかいう歌の文句が、それく〜城の內と外とに別れた夫婦をひきあわせる神の導きの役を果しているよう 射た班鳩の落下が、そして安徽では例の大白菜が、更に廣東では妻の教えた「天下統一、お安い御用、 が吹く蘆笙の音が、納西族ではこれまた途々鳥を打ち歩く間、そんな高貴な人の住む屋敷の奥に女房がいるとは知らず すく了解できかねた一つのサインとみることが出來よう。もちろん、苗族の場合では女房をさがしあるく道すがら、夫 て、この着用の催促は連行される繪姿女房が後日の再會のために夫に送つた才覺であり、愚直な男にはその意味のたや さてこの羊皮の裏返しといゝ、 百獸の皮衣といゝ、そして百鳥衣といゝ、すべては 見慣れぬ聞き 慣れぬ 衣裳 であつ 城の外に到着した夫を更に城中の妻にひき會わせる程 孔雀召しませ、

わ

+

る 裳であれ何であれ進んで交換してくれるのであるから、これが百鳥衣でなければ話が予定の通り大團圓とならぬ筈もな チベット族の傳承ではいづれもこうした衣裳を着けて舞踊をしているのである。苗族の場合の蘆笙の吹奏たりとも舞い の衣裳が何故鳥衣でなければならぬのか。 末、手に入れた孔雀の羽の衣に至つてはなおさらであるが、これを着て秀呆は例の孔雀の歌を唱つている。歌の文句は 國の場合は判で捺したようにきまつて鳥の羽根の衣が記憶されていて、さきに述べたようにあたかもこの傳承のメル のちの改造であろうが、歌といゝ鳥衣といゝ、こゝにもう一つ踊りが介在する餘地は考えられる。これが僮族・ しても百種の鳥にしてもその羽毛で縫い上げた衣裳なら見た目も綺麗であろう。 つたことを想像してみたのだが、あるいはさらにこの衣裳は舞踊と關係があつたのではないかとも假想している。 マールのような存在となつているのであろうか。このことは中國大陸ではこの説話が崩れずに傳えられてきた證據にな の ところで、心待ちにしていた夫がいよ~~城に姿を現わしたとわかれば、 かも知れないが、私は且つてこの鳥衣の問題を單純に空とぶ鳥に信仰をよせる人々の間に育てられてきた時代のあ むしろ端的にいえば鳥衣は日本の繪姿女房譚がそうであるようにこの説話の不可缺の要素ではないのに、 わが國の場合のように、 殿様は妻を笑わせたい一心で夫の着物が桃賣りの衣 あとは破顔さえすればよいものを、 廣東の 秀呆が 毎日山に 入つて 辛苦の 何故、 白族 • 雉に 中 ク

繪姿女房譚の系譜

と全く無緣ではあるまい。

(二九三) 三九

ぬこともあるまいという卑見はある。天人の衣も邪惡な者には仙女の呪術によつて無價値以上の死をすら意味する衣に ろう。たゞ、 この點がやゝ未解決のまゝにのこされるが、繪姿女房譚に羽衣型を伴うものがあるだけに、今後究明してみる必要があ そんな尊い衣を何故他人と交換して幸福になれるのか。逆に、この貴重の天衣をつけて皇帝・高官が不幸になつたのか。 變するというのではなかつたろうか。 それともあるいはこの鳥衣は單に舞踊の具というにとゞまらず、天人の衣裳を暗示しているのであろうか。たゞし、 同一の衣が幸・不幸の兩方に働くというこのジレンマについては女房のもつ靈力という點から説明のつか

+

返えりをすると、とたんに皮はすつかり體について離れず、何度宙返えりし逆立ちしても、ついぞ元の姿にはもどらず、 動物の皮を身につけるなら兼ねての御意に從おうと皇帝に衣の交換を促がす。ところが皇帝がひと度これを着てとんぼ 龍衣をつけて玉座についた若者の命をうけた廷臣らによつて、たちまち刺殺されてしまうのである。 た蟇蛙がとんぼ返えりをうつと忽ち青年に變じ、再び宙返えりをするともとの蟇蛙にもどる奇妙さをみて、 繪姿女房譚のこの鳥の衣の要素に關していちじるしく異つた外觀を呈しているのは一匹の疣だらけの蟇蛙が美女を娶 人間に變じて皇帝になるという、さきにふれた川苗の傳承である。これは件のごとく宮廷閉居の女房の前に現われ 女房はその

譚は多分に複合のあとをとゞめ、蟇蛙の皮衣も鳥の羽衣とおきかえられたものと想像されるが、夫がとんぼ返えりをし

皇帝にはついぞ不可能であつたというのは、女の力以上にその秘密はありそうにない。この傳承

大蛇ないし蜈蚣退治の物語に人間の娘と蟾蜍の登場する傳承が他の土地にみられるところから、この川苗の繪姿女房

て人間に變じたのに、

は夫の方が異類型で語られている點において特異であるだけでなく、繪姿女房說話の着物の交換の不思議さを解く上に 看過し難い貴重な存在であるかもしれない。

な

いても、

譚の型をとつてはじまるものゝ多い點は改めて注意されなければならない。 と同じく、天女のもつ勸善懲惡の靈力がそこに働いていたからではなかつたろうか。 の裏がえしは群衆と笑わぬ女房とを哄笑させても、 これに關して想起されるのはさきにふれた雲南チベット族の傳承にある羊の裘衣の裏がえしの一件である。 邪悪の皇帝にはそれが破滅を意味したというのは、 とすれば繪姿女房說話に異類女房 蟇蛙の皮の場合 善良な男

ても、 0 れている地域をいち~~記してはおらないのであるが、これがたとえ廣州の「中山大學々報」に掲載されているといつ 省とか何省某少數民族とのみいつてその採集地點を明示しないものはあるにしても、その分布はおゝむね江南より華南 い どよりして、さきに述べた繪姿女房譚の予想分布地域からこれだけが獨りとび離れて採錄されたという可能性はすくな 集地點を明記してないといつても「民間神話全集」 および西南中國に集中している。譚氏がその論文で觸れたいわゆる「羽毛衣型」の説話は上述のようにそれらが傳承さ 流傳地點をたま (一明示しているものの殆ど大部分が、江蘇・浙江並びに福建および廣東の四省に集中している點な のではないか。 中國大陸における繪姿女房譚の分布に、一つの傾向のみられることは、今までの記述から明らかなことであろう。 この型の傳承が主に嶺南に多いという確かな證據にもなるまいというなら、これは今保留するとして、同じく採 たど、 鐘敬文氏によれば「百鳥衣型」 の百鳥毛衣の説話の方は本書に收錄されている他の說話傳說中、 説話、すなわち 繪姿女房譚は

繪姿女房譚の系譜

(二九五) 四

「在中國境內流行頗廣……」

といわれている。

だ黃河流域や直隷の地において、 この型の昔話の傳えられ ているこ とを知らないが、 もし今後追々とこの傳承の 層はあるにしても、まづはわが國のこの說話は江南あたりを媒介にして大陸とつながるとみるのは常識というものであ る問題がいゝ殘されている。 ある一角をその傳來地と假定してみることのみではないのである。こゝに是非檢討して然るべきこの說話の出自に るかもしれない。しかしこの際、わが國のこの說話の系譜について特に問題にすべきことは單に不確かなまゝに大陸 いとなれば、 の資料が入手されていくにつれて、果して予想のごとくその分布が揚子江流域を遙かに越えて北方に密集することがな かし果して、 シナ海の彼岸とこちらの島々とで、男の着る衣服が鳥の羽根でつくつたものでなければならぬか否か 華北の塞下より華南まで、この說話がたしかにまんべんなく捜しだせるのかどうか。 寡聞にしてい 關 新 の 0

ての可能性ではない筈である。いづれにしても日中間にみるこの説話のプロローグにみられる諸型の不思議な一致は に加除・添削されたことも計算に入れてしかるべきであるが、これはひとり中國大陸だけの、あるいは日本だけに限つ の間に同類の見出し得る點である。もつともそれら資料の蒐集・記錄化の過程で適宜、あるいは恣意的に、 今後資料の追加につれて一層はつきりして來るに相違ない。 としても、まず注意すべきは、上述のようにいくたのバリエーションをなしながら、それが不思議と大陸と列島 はじめに女房の出自を東西の比較のもとに列記してみたが、そのいづれが原型に近いものであつたかは詳かに 時に 無意識 し得ぬ の 彼

この事實に對する確率の高い見通しは、同じく日中間に共通して傳承する他の說話類の根氣强い入念な比較研

究の

のではないか? おう一个にして認められるように 違 み重ねを待つほかあるまいが、しかし目下私の手にしうる資料による限りではつぎの二つの假説のいづれかであるに ない。 その一つはすでに大陸にこの繪姿女房譚のいくつかのバリエー という公算であるが、二者擇一とすれば、たしかな根據のあつてのことではないが、 (時間的にしろ、空間的にしろ) 相前後していくどにも亘つてわが國にもたらされ ションがあつて、それらが大陸渡來の諸文物に 私はこの可能性 相

はすくないと考えている。

不思議ではないのに、 示するのではなかろうか のであるから、鳥の羽衣という要素をもつ繪姿女房譚の例が一つ位は忘れられないで日本のどこかに傳えられていても 公算である。 歳月經つ間に、 もう一つの假説は日本に輸入された原になるこの説話が他の説話・傳説、 これほど大陸に普遍的に認められる鳥衣の要素、 種々の異傳を生み、これは中國大陸でも同樣であつて、それが偶然に彼此パラレルをなしているという それが今のところいつこうに認められないのは、 というよりそれが中國でのこの說話の主要點ですらある この後者の假說の一概に否定しがたいことを暗 あるいはそれらの一部分と複合しあつて、

であつて たゞの一度限り傳えられたに過ぎぬと、 たゞこ」に今、 a few ではないというほどの意である。 複數次輸入を否定し、 嚴格に主張するつもりではない。もし單數次といつて語弊があるならば 單數次渡來說を假定したといつても、 この繪姿女房譚がわが國 0 列島 0

のような、 授し出せるかもしれぬし、 かし今後おそらく丹念に捜せばエバーハルト氏が江南などの民間説話集から收錄したものや、安徽文藝にみた傳承 男が王邸に野菜賣りにゆく云々のタイプの物語のうち、 あるいはまた、日本の邊土に、妻を訪ねてゆく男の着る衣に何らかの説明がついている傳 鳥衣の條件を忘れたものゝ一つ二つが大陸の

繪姿女房譚の系譜

(二九七) 四三

承が傳えられていることが報告されることもないとはいえないであろう。 ても一段とはつきりした見通しもたとうと思われるのである。 そうすればわが國の繪姿女房譚の出自につい

+ =

常居しない者を偲ぶために、その姿を繪に描くということは中原では少くも東周末にはあつたと考えられる。齊の人、 ければならぬ筈だが、それでは一體、似顔繪などということが何時の頃から行われるようになつたのかといえば、傍に で ない。そして繪姿女房譚の中の畫いて與えた姿繪がもとで破局が訪れるという顚末は、 ことには問題はあろうが、少くも漢代にはこういう想像が單なる空想ではなかつたことが確かであると思うのは、 て、漢の皇甫謐は、その際、似顔畫を描かせてこれをたよりに搜索させたものと註している。これを殷代の事實とみる がそれであるが、 敬君なる者が、齊王のため九重臺を描き、歸るを許されず、愛妻を偲んでその姿繪を描きこれに對した云々という傳承 無關係ではなかつたかも知れない。にも拘らず、この繪姿の一件はこの說話が最初から是非とも缺くことの出來ぬ要因 女の新しい關係が女の美しい姿繪を媒介にして生じることは、昔も史書にはのらずにしまつた例の甚だ多かつたに相 合は後宮數多で、 の詩や馬致遠の漢宮秋で餘りに有名な前漢十代元帝の後宮王昭君の哀話にもこの繪姿が登場するからである。元帝の場 あつたようには考えられぬのである。 繪姿女房譚というからには、描いて與えた肖像畫が殿樣の目に觸れる一件が當然この物語の起伏の一つをなしていな 常に見ゆるを得ず、ために畫工をして描かしめた姿繪を案じて御幸したというのであるが、およそ男 かの殷の武丁が夢にみた說という人物を、百官に命じ民間に求めしめるという「書經」の古傳につい あるいはそうした事件の記憶と

とも呼ばれるこの説話が日本では鳥衣の要素を全く缺いて傳えられているように、少くも繪姿の一件を缺いた繪姿女房 繪姿女房譚という稱呼が繪姿の要素を必須のように思わせるが、實はむしろ後の複合ではなかつたろうか。鳥羽衣譚

說話が存しても不思議ではない。

下をつれて彼女を强奪してゆく……という前段に續いて、その後半は上述のように古卡が鳥衣を着て妻を尋ねるという 繪姿女房譚と全く同じ結末を辿つている。 の選り分けなど數々の難題を夫の古卡に課すのを、古卡は妻の入れ智慧でつぎ~~に解答するので、據ろ無く土司は手 は廣西の僮族が傳承する百鳥衣の叙事詩である。 引證してきた中國側の資料は悉く文字通りの繪姿女房譚であるが、實は姿繪の一件を缺く唯一の例外があつた。 例の鷄の化した美女依娌を知つて、これを欲しさに土司が大豆と胡麻 それ

る。 ろなく焙烙賣りとなり、城のあたりをふれあるく云々という話と同様で、難題と繪姿の二つの型の女房譚の複合とみらん。 權力者を追放・殺害してめでたし~~となるいわゆる難題女房譚は中國にも隨分と例が多いようである。たゞ興味をひく この叙事詩では話の筋の關係から難題の解決が直ちに事件の結末大團圓にはなつていないが、 0 れるのであつて、前半の難題の解決で物語は一段落であり、これだけで立派に一つの昔話になつているのである。 て殿はその繪の女を欲しくなり、夫に「灰繩、それに叩かぬ太鼓に鳴る太鼓云々を持つて來い」という難問をふつかけ の高田郡小田村に傳えられる昔話・ は雲南の傈僳族 しかし僮族のこの傳承が果して繪姿女房譚の古い型を留めたものかといえば、それは疑わしい。むしろこれは廣島縣 しかし繪姿女房の才覺はこれを悉く解決し、却つて殿樣を打ちのめすが、殿は暴力で女を連れ去る、 四川の四土及び康定並びに西康の昌都東南の地などのチベット族のものにしても、(4)(4) ――貧しい夫婦。その妻が夫に與えた姿繪が風にとばされ、殿の屋敷におち、これをみ 難問氷解の果てに貪婪の 湖南の苗族のも 男はよんどこ 僮族の

繪姿女房譚の系譜

(二九九) 四三

いつても、 の入手を俟つてあらためて論じたい。 せば廣島・九州型もきつと大陸のどこかに流傳していないという確信はないから、この問題に關しては更に多くの資料 女の存在を見聞するの のにしても中國大陸の難題女房譚は美貌の人妻を横取りせんとして、その夫に難題をふきかける暴虐な支配者が、 繪姿の要素をもつ廣島や九州地方のものよりは、これを缺く東日本の型と一致するものがある。 に例の繪姿を手に入れるといういわゆる繪姿のモチーフは無く、この點、 同じく難題女房説話 かしさが

系譜を中國大陸に求むることができるというにとどまらず、この型の傳承の變化が、あるいは他說話との複合の諸型が 結末の細部まで驚くほどの一致する例が、 出まかせにいつて要求した品物が異體の識れぬ怪物だつたりして、ついに自らその怪物の犧牲になつてしまうといつた 族**?)**女房の出自は多樣であるが、しかし話のこの冒頭部分からして日中間に必ず互ひに比較されるものがあり、そし 水浴中の天女の羽衣が緣での羽衣女房であつたり(湖南苗族)更に時には大金持の娘を女房にしたり そこで貰つて歸る女房が龍女であつたり(四川の四土及び康定の西藏族、西康昌都の同族、雲南傈僳族、 難題女房譚の場合も女房の出自は尋常ではない。多くは例によつて貧しい男が小蛇乃至魚を救うのが緣で龍宮へ參り、 中國にも て、いよく~權力者の課題の突飛な内容であるが、これまた概ね類同あり、そして最後に權力者がいうに事缺いて口から にはなろうかと考える。 話が煩しくなる上、繪姿女房譚の比較をもつて類推して貰つて決して誤りない故に、こゝでは細部を一切省略するが、 日本にもそれん~に捜し出せるということであつて、さきに述べた繪姿女房譚の單數次輸入に關する推論の傍 日中の間に指摘できるのである。この一致は、 したがつて日本のこの説話の (採集地不明・漢 湖南苗族等)

僮族の 「百鳥衣」 の傳承であるが、 この叙事詩の採集・ 整理の過程について、 撒尼族の 「阿詩瑪」 にみられる

衣 布するとされるこの説話の數多い蒐集と、さらに大陸の西方とくにインド・南方諸地域にこの種の傳承の有無を確めて う繪姿女房說話の先行型を假想しているのであるが、いずれにしろ、一段とはつきりした見通しをうるには、 ような詳しい經緯を知ることができれば、かなり明確な推論も可能とな ろうが、私は 中國の 難題女房譚 とこの「百鳥 の傳承などの存在によつて、繪姿のモチーフをもたぬ繪姿女房譚(――という表現が煩しければ鳥衣型說話)とい かなり流

みることが肝要となつて來よう。

(1931.12.5)

信

- (1) 佐々木喜善「紫波郡昔話」一〇六頁
- 2 森脇太一「川本・粕淵・田所・井原・市木・各住鄕・三原・三各昔話集」 四頁
- (3) 關敬吾「島原半島民話集」一二一頁
- (4) 柳田國男「桃太郞の誕生」(三省堂版)三四六―三四九頁
- (5) 「鄉土研究」三卷九號 五五九頁
- (6) 佐々木喜善「聽耳草紙」(三元社版)二十一二十五頁
- (7) 「昔話研究」二卷二號 八四—九五頁
- (8) 柳田國男「前揭書」三四一頁
- 9 Eberhand, W.: Typen Chiesischer Volksmärchen, (1937), S. 251~252.
- 香坂順一・竹村猛譯「廣東の民話」中の「羽衣の譚」(「嶺南聊齊」より) 一九―二四頁 事」による) 「吹簫人」の中の一篇「孔雀衣」のはなし(一〇〇一一一五頁)はとの話と全く同一の筋である(鍾敬文「中國的天鵝處女故 採集地點を明示していないが米星如編
- $\widehat{11}$ Graham, D.C.: Songs and Stories of the Ch'uan Miao. p. 140~143, p. 249~250.
- (12) 邦譯あり。宇田禮・小野田耕三郞譯「阿詩瑪」所收
- 13) 「龍女和樵哥」(「阿一旦的故事」一九六〇年、上海文藝出版社刊所收)

繪姿女房譚の系譜

二〇一)四七

- 岩崎敏夫「磐城昔話集」八〇一八一頁
- 「一桶飯乾」(一九五五年・安徽人民出版社刊)所收
- 「苗族民間傳說」(一九五八年・作家出版社刊) 所收
- **17** 「藏族故事集・澤瑪姬」(一九五九年・作家出版社刊) 所收
- 19 「民間神話全集全一册」一九三三年・普益書局刊

李星華記錄整理「白族民間故事傳說集」(一九五九年・人民文學出版社刊)

18

- (19) と同書 四九二頁
- 21 うち浙江の紹興、同じく杭州、江蘇省・廣東省に各一例、他の三例は採集地不明
- 22 エバーハルト氏は繪姿女房の出自については全く問題にしていない。
- 23 前揭書 「藏族故事集・澤瑪姬」一一〇頁
- $2\overline{4}$ 前揭書「白族民間故事傳說集」一四二頁
- 25 前揭書 「苗族民間傳說」二五頁
- 26 前揭書「 一桶飯乾」二六頁
- **27** 前揭書 "Sangs and Stories of the Ch'uan Miao." p. 182~183.
- 28 (26) と同書 p. 140~143.
- 29 (26) と同書 p. 249-250.
- 30 旅と傳說」 三の十一
- 31 前揭書「一桶飯乾」二七頁
- $\hat{3}\hat{2}$ 前掲書「藏族故事集・澤瑪姫」一一一頁
- 前揭書 "Sangs and Stories of Ch'uan Miao" p. 140~143
- 譚達先「試論漢民族民間童話的思想內容和幾個典型人物」
- 「人民文學」一九五四年五期所收

37 「苗族民間傳說」二六—二七頁

38 前揭書「阿一旦的故事」九九頁

39 前揭書「民間神話全集」四九二—四九三頁

40 前揭書「一桶飯乾」二七頁

41 前揭書「藏族故事集」一一三頁

42 礒貝勇「安藝國昔話集」繪姿女房其の一 一一二—一一六頁鍾敬文「中國的天鵝處女故事」(「民衆教育」季刊三—一所收)二三頁

43

44 「鮑魚」(賈芝・孫劍冰編「中國民間故事選」一九五九年・人民文學出版社刊所收)

45 「喀斯波勒勒」「民間文學」一九五八年九期所收)

46 「霞達帕那」(西南師範學院中文系康定採風隊編「康定藏族民間故事集」一九五九年・人民出版社刊所收)

47 48 「木匠和龍王的女兒」(凌純聲・芮逸夫「湘西苗族調査報告」(一九四七年・國立中央研究院歷史語言研究所刊所收)(前代)(前代))(京邦書・湾東東)原東) 「龍女」(前掲書「澤瑪姬」所收)

49 前掲書「民間神話全集」所収

「寶のひようたん」(中國文學會編「中國の民話」一九五七年・未來社刊所收)

前掲書 小野・宇田譯「阿詩瑪」「解說」二〇七—二二三頁を参照せよ。

本稿の作成にあたり畏友常見純一氏より一部資料の教示をうけた。ここに付記し感謝の意を表したい。